

# 大平さんとスイス大統領

金子 一平

たまたま昨年九月スイスのシエバラ大統領を訪問したところ、久闊を叙する暇もどかしげに、いきなり私の手を力強く握りしめて、「大平首相の死は、日本にとっても世界にとっても、本当に大きな損失で残念でしたね」と、故首相の人柄を偲び、その死をいたむ言葉を繰り返して述べて、私の手を容易に放そうともしなかった。

そのつづらな、大きな目が、心の底から大平さんの在りし日を偲ぶ表情にみち溢れていた。

大統領は、私が第一次大平内閣の大蔵大臣在任中、スイスの大蔵大臣として日本に招聘し、大平さんとも旧知の仲であったが、大平さんの東洋的風貌とその独特のトツトツたる話しぶりが、このフランス系の政治家によほど強烈な印象と人間的信頼感を与えたのだらう。

永い大平さんのお付き合いを通じ、相手の大平さんからうけるその強烈な印象と、その人間的魅力は私にも充分理解できることだったが、特にシエバラ大統領にとって、大平さんは政治家としての同じ悲しみを分ちあえる仲でもあった。

それは一昨年の総選挙で一般消費税が選挙の争点となり、予想外の結果に終わったため首相の責任まで問われることになったが、それと軌を一にして、スイスでも付加価値税の導入を国民投票にかけて一敗地にまみれ、大蔵大臣として一時失意のドン底にあったシエバラ氏だっただけに、今日でこそ大統領の地位を占めることができたものの、大平さんのおかれた立場への共感がひとしお深いものがあつたからだと察せられた。

更に大統領は言葉をついで、私は大平さんから贈られた英文の『私の履歴書』には格別深い感銘をつけたといふのである。

それは、スイスはもちろんヨーロッパの社会には、今日なお階級制度が厳として存在し、政治家の息子は政治家に、肉屋の倅は肉屋になるのが通例で、誰もこれを怪しまないしきたりになっているのに、日本では明治維新以来貧しい農家の倅でも一国の宰相になれる社会になっている。

それが今日のめざましい日本の繁栄の原動力だったということが、いま初めて判ったというのである。

大平さんを喪つてから既に半歳余、一面識しかない外国の政治家の心にも強烈に生き続ける大平さんの在りし日を偲び、心からご冥福を祈っている。

(衆議院議員・第一次大平内閣大蔵大臣)